ハイデガーのパイデイア論

――プラトン「洞窟の比喩」解釈から――

*田　端　健　人

Heideggers Denken über die παιδεία
Aus der Auslegung des Höhlengleichnisses in Platons Politeia

TABATA Taketo

要　旨

ハイデガー（Heidegger, M.）の思索に、教育哲学あるいは教育論はあるのだろうか。本稿は、ハイデガーが教育を語った重要な箇所、プラトン『国家』「洞窟の比喩」解釈に着目し、パイデイア（παιδεία＝教育）に関するハイデガーの思索を再構成する。

プラトン『国家』における「パイデイア」というギリシア語は、一般的に、「Bildung（陶冶、教養、人間形成）」とか、「Erziehung（教育）」とドイツ語訳されるが、ハイデガーは、こうした翻訳を、19世紀の「心理学主義」の産物として厳しく批判する。19世紀前半に活躍したヘルバルト（Herbart, J. F.）も、ハイデガーによれば、心理学主義を創始推進した人物である。本稿ではまず、ハイデガーのこうした心理学主義批判とその克服を考察する。そして、プラトンのいうパイデイアは、ハイデガーにとって、「現存在（Dasein）」や「世界内存在（In-der-Welt-sein）」といった概念と同様、人間存在の新たな規定様式だったことを指摘する。

次に本稿では、プラトンのパイデイアに関するハイデガー独自の翻訳に着目し、この翻訳に凝縮されたハイデガーのパイデイア論を、1928/29年冬学期の「哲学入門」講義をもとに解釈する。こうした解釈を通して、ハイデガーのパイデイア論は、私たちが慣れ親しんでいる教育活動を改めて捉え直すための、一つの「教育哲学」になりうることを示したい。

Key words：心理学主義批判、教育哲学、支え、保護、ヘルバルト、ナトルプ

はじめに

ハイデガーの思索に、教育哲学あるいは教育論はあるのだろうか。ハイデガーは、教育論を正面から展開することはなかったし、そもそも、教育について言及することさえ稀であった。しかし、ハイデガーは、自らの思索の極めて重要な箇所で、教育を語っている。その一つは、プラトン『国家』「洞窟の比喩」の解明である[1]。「洞窟の比喩」によってプラトンが明らかにしようとしたのは、パイデイア（παιδεία＝教育）の本質であるが、ハイデガーは、これをアレーテイア（'αλήθεια＝真理）の本質についての教説として解釈する。

ハイデガーのこの解明に関する先行研究は、私見によれば、哲学の領域では、アレーテイア論として考察され、パイデイアに関する洞察は主題化されてこなかった[2]。同様に、教育学の領域でも、やはり、アレーテイア論が主眼に据えられ、アレーテイア論から教育

＊　学校教育講座

が捉え直されてきた[3]。確かに、ハイデガーのアレーテイア論は、教育研究に、深く豊かな導きを与えてくれる。ハイデガー自身がいうように、「『陶冶（Bildung＝教育、人間形成、教養）』と『真理』とのあいだ」には「本質連関」があるからである（GA 9, S. 218）。これに対して、本稿では、ハイデガーのパイデイア論に、焦点を当ててみたい。そうすることで、ハイデガーの思索が、教育哲学あるいは教育学と、これまで以上に緊密に結びつくかもしれないからである。

1．「パイデイア」の一般的翻訳に対する批判

パイデイアについてのハイデガーの思索は、プラトンのこのギリシア語をどう翻訳するか、に一つの結晶をみる。このギリシア語を、Bildung や Erziehung とドイツ語訳する一般的な翻訳を、ハイデガーは厳しく批判する。「パイデイアは、Bildungではない」（GA34, S. 114）。この語を Formung と翻訳するイェーガー（Jaeger, W.）にも、ハイデガーは、「学者らしい表象」、と手厳しい（vgl., GA 36/37, S. 207）。ハイデガーは、「Bildung や Erziehung としてのパイデイア―最悪の（übelst）19世紀」（GA 34, S. 116）、とさえいう。1942年の著作になると、ハイデガーは、パイデイアという「この名称を、決して充分ではないとはいえ、それでも最も容易に満たすのは、ドイツ語の Bildung である」と述べ、この翻訳に若干の理解を示すが、すぐ続けて、その際「私たちは、…この語〔＝ Bildung〕が19世紀後半になって陥った誤解を忘れなければならない」[4]、と釘をさす（GA 9, S. 217）。そして、ハイデガーは、パイデイアを、端的には Gehaltenheit と翻訳する（vgl., GA 34, S. 114）。こうした翻訳に結実する自らのパイデイア理解を、ハイデガーは、Bildung や Erziehung に関する19世紀の捉え方に対する批判として、意図的にはっきりと位置づけていたのである。

では、19世紀のパイデイア―Bildung 理解とは、どのようなものだったのだろうか。教育学の文脈からみると、19世紀前半は、ヘルバルト（Herbart, J. F.）が教育学を理論的に基礎づけた時期であり[5]、19世紀後半は、ツィラー（Ziller, T.）やライン（Rhein, W.）といった「ヘルバルト主義者」が活躍し、ドイツだけでなく、アメリカ合衆国や日本の教育学と教育実践に大きな影響を与えた時期である[6]。また、19世紀後半は、ディルタイが、ヘルバルトにも論及しつつ、ブレスラウやベルリンで教育学を講義した時期でもあった（cf., 小笠原, p.96）[7]。

Billdung との関連で19世紀を批判する時、ハイデガーが念頭に置いていたのは、上記のような周知の歴史的状況だったのだろうか。単純な疑問だが、ハイデ

1　ハイデガーが「洞窟の比喩」を主題的に論じた場面として、少なくとも以下の４つをあげることができる。①1926年夏学期の「古代哲学の根本諸概念」（vgl.,GA22,S.102ff.）、②1931/32年冬学期の「真理の本質について」（vgl.,GA34,Erster Teil）、③『存在と真理』と題された全集版講義録に所収されている、1933/34年冬学期「真理の本質について」（vgl.,GA 36/37,S.127ff.）、④1942年に出版され（cf.,渡辺2003,p.326;GA9,S.483）、『道標』に所収された『真理についてのプラントンの教説』（vgl.,GA9,S.203ff.）である。

2　例えば、渡辺二郎（cf., 渡辺1962,pp.439-441）やペゲラー（vgl.,Pöggeler,O.,S.100-S.104）、渡部明（1994）や相楽勉（2000）の論考では、パイデイアは、主題的には論じられていない。西山達也は、「パイデイア」の訳語として、ハイデガーが Haltung に関連する語を用いた点を指摘し、パイデイアに言及するが、ハイデガーのパイデイア論を主題化してはいない（cf.,西山, p.18）。

3　例えば、中田基昭（cf., 中田,pp 29-42）や川村覚昭（cf., 川村,pp.159-161）の論考では、ハイデガーのパイデイア論は、主題的に論じられてはいない。ハイデガーの影響を受けて、パイデイアを論じた教育研究者としては、バラウフがいる（vgl.,Ballauff,S.5）。バラウフは、『国家』の当該箇所（514a-518d）をドイツ語訳するにあたって、「Unverborgenes」や比較級の「unverborgener」といった訳語を用い、ハイデガーを踏襲するが（vgl.,a.a.O., S.12）、パイデイアを「Bildung」と同一視しており（vgl., a.a.O.,S.17）、こうした同一視に対するハイデガーの批判や、そこから生じるハイデガー固有のパイデイア論には論及しない。カウダーは、洞窟の比喩の入門的解説書で、上記バラウフの著作に恩恵を受けたことを記すが、バラウフの著作は「二次的文献」でしかない、とする（vgl.,Kauder,S.10）。なぜなら、バラウフの解釈の背景となっているハイデガー哲学は、「その思索の複雑な導きと文体と相俟って、今日、教育学を学ぶ者にとっては、広くよく知られているものとしては、もはや前提されないとしなければならない」からである（Kauder,S.10）。マイヤーは、ハイデガーが「プラトンのもとで Bildung の根源を、すなわちパイデイアを、問うに値するとみなした」と言及するが、ハイデガーのパイデイア論には立ち入らない（vgl.,Mayer, S.141）。そして、マイヤーは、教育に関するハイデガーの着手を展開して、「自己形成すること（Sichbilden ＝自己を陶冶すること）」を、「豊かな人格性へと自己を展開すること」（a.a.O.,S.146）と要約する。だが、これは、ハイデガーが批判した Bildung 観に他ならない（vgl.,GA9,S.236）。

4　〔 〕内は、以下、引用者による補足である。

5　ヘルバルトの主要著作と出版年をあげれば、『ペスタロッチの直観の ABC』（1802年）、『教育の主要な任務としての世界の趣味的表現について』（1804年）、『一般教育学』（1806年）、『論理学綱要』（1806年）、『心理学教程』（1816年）、『教育学講義綱要』（1835年）である（cf., 是常,pp.288-291）。

6　「教育の科学的研究のための全米ヘルバルト協会」の創設は、1895年であり、日本では、明治20（1887）年代に、ヘルバルト派の受容が盛んであったとされる（cf., 今井,p.187）。

7　ディルタイの後継者たち、ノール、フリッシュアイゼン＝ケーラー、シュプランガー、リットらは、後に「精神科学的教育学」と呼称され、「二〇世紀にとっておそらく著しい規定的な傾向、潮流を形成することになった」とされる（cf., 小笠原,p.101）。

ガーは、ヘルバルトを知っていたのだろうか。19世紀は、ハイデガーにとって、どのような時代として理解されていたのだろうか。

２．19世紀における自然主義と心理学主義

19世紀、「全ての学問」は、「底なしの自然主義（Naturalismus）と歴史主義（Historismus）」の犠牲となった、とハイデガーはみなす（vgl., GA 56/57, S. 27）。自然主義によって引き起こされるのは、「精神を絶対的に即物化すること」であり、「全ての存在を、有形の質料的で物質的な出来事（körperhaft stoffliches, dinghaftes Geschehen）へと還元すること」であり、「原理的な省察を拒絶すること」である（GA56/57, S. 137）。こうした自然主義において、生の方向は、「経験可能で実践的な生の活動領域における特定の諸業績（Leistung ＝能力、能率）」や「技術の形成」に向けられる（GA 56/57, S. 136）。こうした時代のなかで、哲学が荒廃し衰退している（vgl., GA 56/57, S. 136）。これが、ハイデガーの危機意識であった。

こうした19世紀の只中で、自然主義を乗り越えようとした人物として、ハイデガーは、ロッツェ（Lotze, H.）を評価する（vgl., GA56/57, S. 136ff.）。「ロッツェは、彼の最初の『形而上学』において、ヘルバルトと徹底的に対決した」（GA 21, S. 68）、とハイデガーは評する[8]。ヘルバルトへの、ハイデガーの数少ない言及の一つである。この言及から窺われるように、ハイデガーは、ヘルバルトを、自然主義、そして、そこから生じた心理学主義（Psychologismus）を促進した人物として位置づける。1913年に発表された「心理学主義の判断論—論理学への批判的・積極的寄与—」の「序論」には、次のように記される。「ショーペンハウアー、ヘルバルト、フリースによって創始促進され、長い間支配的であった心理学的なカント解釈は、…自然科学と一緒になって、心理学を包括的で魅惑的な意義あるものへと高めたと同時に、『意識の自然化』を引き起こした」（GA 1, S. 63）、と。「意識の自然化」とは、上記の「精神の即物化」とみなしてよい。倫理学や美学と並んで、教育学でも、「心理学的方法」が支配的となっている（vgl., GA 1, S. 18, S. 63）、とも記されるが、これもヘルバルトを念頭においた叙述である。これらの叙述と関連づけるならば、19世紀のパイデイア—Bildung 理解をハイデガーが批判する時、彼の批判には、19世紀の自然主義と心理学主義に対する批判が込められており、この批判の射程には、ヘルバルトも入っていたことになる。

こうした心理学主義批判によって、ハイデガーは、ナトルプ（Natorp, P.）といわば「共同戦線」を張ることになる[9]。ヘルバルトが促進したカント解釈や論理学における「心理学的方法」と対決したのは、「超越論的方法」であるが、これは、コーエン、ヴィンデルバント、リッケルトといったいわゆる「新カント学派」によって唱道され、この対決には、ナトルプやフッサールも組している（vgl., GA 1, S. 63f.）。なかでも、ナトルプは、教育学者でもあり、ヘルバルト教育学を明示的に批判している。ナトルプによれば、ヘルバルトは、「教育の目的を取り扱う場合には、倫理学にその基礎を据え、また教育の方法ないし手段を取り扱う場合には、心理学を基礎とした」が、「全体としての哲学の上に教育学を打ち立てるまでには至らなかった」（ナトルプ, p. 12）。本来、「哲学と教育学は、まさに、それらの広がり全体とそれらの分節において、相互に帰属し合って」（Natorp, 1907, S. 214）おり、「論理学とも…美学とも深き関係を保つ」（ナトルプ , p. 13）のだが、ヘルバルトはこのことを看過した、とナトルプは批判する。ヘルバルトにおいては、論理学は、「心理学の単なる付属物」におとしめられてしまった。こうしたナトルプの批判は、ハイデガーの心理学主義批判にも繋がっている。

8　ロッツェは、1844年、ヘルバルトの後任としてゲッティンゲン大学の哲学教授となった（cf., 廣松渉他編『哲学・思想事典』、岩波書店、1998、「ロッツェ」の項目を参照）。

9　おそらく、ハイデガーは、ナトルプを介して、ヘルバルトを一層よく知った、と推測される。ハイデガーは、ナトルプと親しく交流した。例えば、ハイデガーのマールブルク招聘（1923年）には、ナトルプの度重なる尽力があった（cf., 渡辺2003,p.316; 茅野,pp. 337-338）。この招聘の直前、ハイデガーは、自らのアリストテレス研究を、ナトルプに送っている。これは、後に『ナトルプ報告』と呼ばれる論考である（『ナトルプ報告』の成立経緯に関しては、高田珠樹の論述が詳しい）。また、ナトルプは、若きハイデガーを伴ってしばしば散歩したとも伝えられている（cf., ガダマー,pp.78-79）。ハイデガーとナトルプの親密な交流と思想の親近性に関しては、ヴォルツォーゲン（Wolzogen,C.v.）の考察がある。

3．ハイデガーによる心理学主義批判

論理学の内部で心理学が優勢となり、ひいては論理学が心理学の付属物となってしまうのは、ハイデガーの論述を要約すれば、次のような事情によってである。すなわち、伝統的理解によれば、「論理学とは、思惟（Denken）に関する教説、それも、正しい思惟に関する教説」（GA 21, S. 37）である。思惟は、それが生き生きと営まれている時には、「心的な（seelisch）出来事、すなわち心理的な（psychisch）現実（Wirklichkeit）」（GA21, S. 37）である。「心的な現実は、…心理学のテーマである」（GA 21, S. 37）。こうして、論理学は、心理学の一学科となる（vgl., GA21, S. 38）。

こうした心理学主義が可能となるのは、「精神的なもの―意味〔や理念〕―は、心理的なリアリティ（Realität）としてのみ接近可能である」、という「理性と精神に対する自然主義的態度」が支配する基盤においてのみである、とハイデガーはいう（GA 21, S. 49f.）。思惟すること（Denken ＝考えること、思考すること、思索すること）は、哲学することの本領であるが、思惟することが、心理的な出来事でしかなくなってしまうことは、ハイデガーには、哲学の荒廃と映った。ハイデガーによれば、心理学主義の問題の本質は、「リアルな心理的存在」と「〔思惟の〕諸法則という理念的存在」とを、「誤って混同すること」にある（GA 21, S. 53）。そして、この混同は、「哲学が、当時〔＝19世紀〕、広範囲にわたって、いわば、存在の多様な圏域から締め出されており、これらの圏域に目を塞がれていた」ことに根拠をもつ、つまり、哲学が「存在のある一定の範囲へと、すなわち、物理的なものと心理的なものというリアルな自然の存在へと閉じ込められていた」ことに根拠をもっている（GA21, S. 53）。こうして、物理的なものと心理的なものとを唯一の存在とみなす存在了解を打破すること、ロゴス（λόγος）の学である論理学（Logik）を心理学から解放すること、思惟が心理的出来事ではないことを示すこと、そして、精神や理性や意識を心理的なリアリティとみなす心理学主義を克服すること、こうしたことが、ハイデガーの思索の課題となる。パイデイアをBildung や Erziehung と翻訳する19世紀の教育観に対するハイデガーの批判も、こうした文脈で理解されるべきである。

4．人間存在の新たな規定性としての Gehaltenheit

精神や理性や意識、総じて「私たちが心理的なものとか意識とか呼んでいるもの」（GA 21, S. 98）を、心理的なリアリティとみなす心理学主義を克服するために、ハイデガーは、次のように問う。「心理的なものを心理的なものたらしめているのは、一体何なのか、そして、それに相応しい認識を可能にしようというのであれば、この心理的なものは、どのような規定様式を要求しているのか」（GA 21, S. 98）。心理的なものを心理的なものとしているもの、つまり人間存在の新たな規定様式として、ハイデガーは、フッサールの「志向性」を研究し、さらには、「現存在（Dasein）」や「慮（Sorge）」や「世界内存在」といった独自の規定様式へと到る。そして、プラトンの洞窟の比喩を研究する途上で、人間存在の新たな規定様式としてハイデガーが見出したのが、パイデイアであった。パイデイアは、何らかの知識や技能を増やすことではなく、人間の何らかの能力を発達させることでもなく、人間の本質規定に関わる概念である[10]、とハイデガーはみなし、次のようにいう。「パイデイアは、Bildung ではない、そうではなく、ἡ ἡμετέρα φύσις〔私たちの本性〕、すなわち、私たち〔人間〕の最も固有な存在を支配しているもの」（GA 34, S. 114）[11]である。私たち

10　パイデイアは、「身体の全体」と共に「魂の全体」を「転向」させることである、とプラトンはいう（518c;藤沢訳p.104;vgl.,GA9,S.218）。それゆえ、パイデイアは、身体と魂の全体、つまり人間存在全体に関わる概念であることになる。魂の全体を転向させる、というプラトンの言葉は頻繁に引用されるが、ここから、パイデイアが人間存在や人間本質との関連で正面から考察されることは、筆者が知る限り、ほとんどない。こうした考察を推し進めたのは、ハイデガーであり、他には、彼から学んだフィンク（Fink,E.）であった。フィンクは、次のようにいう。「プラトンは、パイデイアを、…魂全体の転向として、人間の根本へと入り込むまでの変革として、性格づける。すなわち、Bildungは、…人間の本質の変容であり、現存在のメタモルフォーゼなのである」（Fink,S.66）、と。こうしたフィンクのパイデイア論を考察することは、今後の課題としたい。

11　ハイデガーのこの解釈は、プラトンの洞窟の比喩の導入の言葉に忠実な解釈である。導入部には、「教育と無教育ということに関連して、われわれ人間の本性を、次のような状態に似ているものと考えてくれたまえ」（514a; 藤沢訳 p.94）と語られ、これから話される洞窟の比喩は、「われわれ人間の本性」の比喩であり、「教育（パイデイア）と無教育（アパイデイア）」は、私たち人間の本性に関わる問題である、とされるからである。

人間に最も固有な存在を支配しているパイデイアを、ハイデガーは、Gehaltenheit と翻訳し、パイデイアのない状態、すなわちアパイデイアを、Haltungslosigkeit と翻訳する（vgl., GA 34, S. 114）。本論では、Gehaltenheit を、「節度ある落ち着きに保たれていること」と訳し、Haltungslosigkeit を、「自制ある落ち着きが失われていること」と訳したい。そうすると、教育する（παιδεύω）という営みは、自制ある落ち着きが失われた状態から、節度ある落ち着きに保たれた状態へと移行させる営みということになる。

ハイデガーによれば、「節度ある落ち着きに保たれること（Gehaltenheit）」は、「自制ある落ち着き（Haltung）」から「発源する（entspringen）」のであり（vgl., GA 34, S. 114）、「この自制ある落ち着きにおいて、人間は、存在者の只中で、自由な選択によって、支え（Halt）[12]を、自らの固有な本質のために引き受ける」（GA 34, S. 115）。そして、この「支え」は、「それに向けて、またそのうちで、人間が自分自身を自分の本質へと授力する（ermächtigen）ところのもの」（GA 34, S. 115）である。このように「自らの選択によって、支えを受け取ること」、換言すれば、「私たち固有の本質を、人間の本質へと、奥底で授力すること」、これが、ハイデガーのいうパイデイアであり、「哲学すること」と深く結びついている（GA34, S. 115）。このように凝縮された論述を、一層内実豊かに理解するためには、この講義（1931／32冬学期）の３年前になされた講義「哲学入門」（1928/29冬学期）が、導きを与えてくれる。というのも、この講義では、「支え」や「自制ある落ち着き」が主題化され、神話や諸学問との関連で解き明かされるからである。

５.「支え」を得る諸様式

この講義で、ハイデガーは、現存在（Dasein= 私たち一人ひとりの人間存在）が「知によって、つまり教授（Lehren）や技術や組織によって、浸透されている」度合いができるだけ少ない状態に着目する[13]。ハイデガーによれば、私たちの現存在が、教授や技術や組織といった知によって浸透されていなければいないほど、現存在は、存在者によって徹底的に支配されて（durchwaltet）おり、存在者に引き渡されて（ausgeliefert）いる（vgl., GA27, S. 357）。「存在者に引き渡されている」とは、「存在者の過剰な力（Übermacht）に曝されていること（Ausgesetztsein）」であり、「存在者によって脅迫されていること（Bedrohtsein）」である（GA27, S. 357）。いわば、存在者の猛威に振り回され、魅惑されたり、駆り立てられたり、翻弄されたりすること、あるいは、恐れおののいたり、萎縮させられたり、時に生命の危機に曝されること、と理解できる。ここでいう「存在者」には、身の周りの自然や人工物、他者、そして自分自身も含まれる。何らかの教育を受けず、技術や組織によって守られていない現存在にとっては、自分自身も、「或る見知らぬ力、デーモン」（GA27, S. 357f.）なのである。存在者の過剰な力に引き渡され、曝し出されていることは、「庇護がないこと（Schutzlosigkeit）」、「支えが－ないこと（Halt-losigkeit）」である（GA27, S. 359）。それゆえ、現存在が、存在者の只中で活動し生きていくためには、存在者の過剰な力から身を守るための、何らかの庇護や支え（Halt ＝停留し安息できる拠り所）が、なによりもまず必要となる。

現存在が支えを得る様式として、ハイデガーは、大きく二つを区別する。一つは、「匿い保護すること（Bergen）」[14]としての支えであり、もう一つが、「自制ある落ち着き（Haltung）」としての支えである。匿い保護された現存在として、ハイデガーは、神話的現存在をとりあげる。神話的現存在においては、匿い保護する支えとして、「魔術や魔法」、「犠牲や祭式」が、意義と効力をもつようになる（GA 27, S. 359）。「昼と夜の秩序と機能、四季や祭典の秩序と機能、また、誕生、婚姻、死、病気、戦争、狩猟、農耕、航海に関する儀式」（GA 27, S. 360）などによって、世界に「秩序と機能」がもたらされることで、現存在が匿われ保護される。ここでは、「支えを－得ること（Halt-gewinnen）」

12　Haltは、「支え」「拠り所」という意味の他に、「停止」「中止」、さらに「停留所」「休息地」といった意味も合わせ持つ。ハイデガーがHaltという語を用いる時には、これらの多義的な意味が同時に響いており、文脈によっては、そのいずれかがとりわけ強調されて響き出てくる。「支え」という訳語にも、ドイツ語の多義性を含めて使用したい。

13　子ども、特に幼い子どもは、こうしたいわゆる文化的な影響を受けることが、おとなに比べれば相対的に少ないため、ハイデガーのここでの考察は、子どもの現存在の在り様を考えるために、極めて示唆的である。

14　bergenには、「秘める」「隠す」という意味もある。

は、「こうした秩序や規約へと自己を接合すること（Sicheinfügen）、こうした魔術的行為において共に行為すること、これらの作用を行使し、これらの作用によって徹頭徹尾支配されていること」である（GA27, S. 360）。こうした支えの性格を、ハイデガーは、「匿われ保護されていること（Geborgenheit＝被護性）、全体としての存在者のなかで匿い保護すること」（GA 27, S. 359）と言葉にする[15]。匿い保護する様態は、なにも、魔術的神話的なものだけではないはずである[16]。要点は、自分自身ではない、誰かによって、あるいは何かによって保護され、支えが与えられる、という点である。

これに対して、もう一つの、自制ある落ち着きとしての支えは、「自分を保ち支えること（Sichhalten）」であり、「現存在自身が、〔自分自身に〕支えを生起させ、存在させる」（GA27, S. 366）。ここでは、現存在において、「存在者に対する根本態度（Grundstellung）が変容し」、現存在と「存在者との対決（Auseinandersetzung）」がはじまる（GA 27, S. 369）。自制ある落ち着きを自分に生起させる現存在にとっては、過剰な力で支配力を揮っていた存在者は、「克服され、制御され、操縦されるべきもの」として自己を示すようになる。そこで、「存在者が何であり、いかにあるか」に関して、「存在者に精通すること（Sichauskennen）」が、本質的に要求されるようになる（GA 27, S. 368）。存在者が何であり、いかにあるかを明らかにすることは、すなわち、「存在者あるいは事柄それ自体を露顕すること（Offenbarmachen）は、学問的認識の一つの性格である」（GA27, S. 369）。

そうすると、学問をすること、あるいは学問を学ぶことによって、現存在は、存在者と対決し、自制ある落ち着きとしての支えを自らに生起させることに、つまりパイデイアへと到ることになるのだろうか。しかし、事はそう単純ではない。確かに、ハイデガーも、「固有に選択された自制ある落ち着きによって、根底から規定されている、そのような現存在においてのみ、なにか研究とか学問といったものが存在しうる」（GA 27, S. 369）、という。しかし、ハイデガーはすぐに、存在者を露顕することは、学問的認識の一つの性格ではあっても、「唯一の性格でもなければ、最も根源的な性格でもない」と続け、「この点にのみ認識の本質を見て取ることは誤謬である」、とさえいう（GA 27, S. 369）。加えて、こうして生起する自制ある落ち着きは、匿い保護する支えと同様に、様々な形式の「退廃（Entartung）」へと常に陥ってしまう（vgl., GA27, S. 363ff., S. 372ff.）[17]。退廃形式の一つは、「経営（Betrieb）」（vgl., GA 27, S. 364, S. 373）である。「匿い保護すること」や「人間に対する面倒見のよさ」（GA 27, S. 373）が行き届くことで、「支えのなさ（Haltlosigkeit）もなく、支えの必要性（Haltbedürfnis）もなく」、「匿われ保護されていないこと（Ungeborgenheit）もなく、匿い保護すること（Bergung）もない」、といういわばなまぬるい状態、保護されていない不安もなければ、保護された安らぎもない、両者の差異が消失した「無差別性（Indifferenz）」へと陥ってしまう（GA 27, S. 364）。これは、「現存在の空虚」であり、「見捨てられていること（Verlorenheit）」、「自己の滑り落ち（Sichentgleiten）」である（GA27, S. 365）。

15　「Geborgenheit」を中心概念として、新たな教育哲学を切り拓いたのは、ボルノウ（Bollnow,O.F.）である。「Geborgenheit」という語は、彼の主著 *Neue Geborgenheit —Das Problem einer Überwindung des Existentialismus—*（W.Kohlhammer,1955）のタイトルにもなっている。彼は、匿われ保護されていること、つまり被護性を、「信頼の感情」とも言い換え、これは、「全ての健全で人間的な発育にとって、そして同時に、あらゆる教育にとって、第一の、不可欠の前提」（Bollnow,S.18）である、という。また、「被護性が…失われてしまうならば、世界は、驚愕させる力（Macht）、子どもに脅迫的に（bedrohlich）襲いかかってくる力のままであり、この被護性の感情が子どもにどこかで再び与えられなければ、子どもは生への意志を拒絶し、希望を失って、委縮せざるをえなくなる」（Bollnow, S.18）、というボルノウの言葉は、使われている語と、保護のない世界についての洞察の点で、本文のハイデガーの語法や洞察と、驚くほど一致する。これは、偶然の一致ではない。というのも、ボルノウは、「一九二八年、…マールブルクのハイデッガーに師事し、さらには彼を追って二ゼメスター、フライブルクへ行った」（岡本,p.4）、つまり、ハイデガーがフライブルク大学へ転任した初年の冬学期（1928/29）になされた「哲学入門」講義を、ボルノウは聴講していたからである。それゆえ、「被護性」というキーワードも、これを中心としたボルノウの教育哲学も、ハイデガーの講義から、直接的な着想を得ている、といっても過言ではないであろう。

16　匿い保護する様態として、「家と家族の庇護的な環境」（Bollnow,S.18）を位置づけたことは、神話的現存在に関するハイデガーの講義を、保育や教育へと具体的に新たに展開したボルノウの優れた功績である。ただし、本稿でのハイデガー解釈によって示されるのは、家や家族等によって匿われ保護された支えに子どもが安住するならば、パイデイアとしての教育は生じない、ということである。

17　自制ある落ち着きの頽廃形式として、ハイデガーは、「心理学的な人間学主義」、「美学的なヒューマニズム」、「実存主義」の三つをあげている（GA27,S.374）。

6．私たちにパイデイアは実現可能か？

では、どうすれば、パイデイアが、すなわち自制ある落ち着きから発源する節度ある落ち着きに保たれていることが、私たち現存在に実現するのだろうか。もし、パイデイアが実現されることを、「太陽それ自身を、それ自身の場所において直接しかと見て」（516e；藤沢訳 , p. 98）とることだとするならば、太陽それ自身は、つまり「善のイデア」は、「最後にかろうじて見てとられるもの」（517b；藤沢訳, p.101）でしかなく、「勇気をもって見てとられることなど、ほとんどない」（GA 34, S. 44）ようなものである。つまり、パイデイアは、実現される見込みが、まずないようなものになってしまう。そうすると、プラトンやハイデガーのいうパイデイアは、今日の私たちの教育には、無縁で稀有な出来事でしかないのだろうか。前述の意味では確かにそうである。しかし、パイデイアに関するハイデガーの思索には、別の解釈の余地が充分に開かれている。

「肝要なのは、パイデイアではない」、とハイデガーは強調する。肝要なのは、パイデイアとアパイデイアの「対決」であり、「両者のあいだ（das Zwischen）、そこから両者がその都度発源する（entspringen）そのあいだ」である（GA 34, S. 114）。この言葉を、私たちは今や、当初よりも一層内実豊かに聞くことができるはずである。パイデイアは、自制ある落ち着きとしての支えを現存在が自らに生起させることによって、発源する。アパイデイアは、自制ある落ち着きとしての支えが失われた状態である。私たち現存在は、おとなであっても、子どもであっても、それなりの知、教授、技術、組織によって浸透されており、存在者の過剰な力に露骨に曝されているわけではなく、全くの「支えなし」の状態にあるのではない。つまり、全くのアパイデイアにあるのではない。私たち現存在が、それぞれの仕方で、世界内でそれなりに活動し生きているということは、何らかの仕方で、匿われ保護されたり、退廃形式における支えを得ていることを示している。多くの場合、私たち現存在が置かれている状態は、完全な意味でのパイデイアでもなければ、全くのアパイデイアでもなく、支えなしではない。そうではなく、私たち現存在の差し当たり大抵の状態は、支えなしでもなく、支えがあるわけでもない、という無差別性であろう。支えのあることとないこととの差異そのものが失われている状態、つまり、パイデイアとアパイデイアの差異が、それゆえ、その「あいだ」が失われている状態であろう。それゆえ、パイデイアを実現するための第一歩は、この「あいだ」を裂開すること、換言すれば、退廃形式における支えのようなものを、思い切って破壊することになる。

このことを、パイデイアとアレーテイアの本質連関の観点から捉え直しておきたい。

パイデイアの本質を明らかにするために、アレーテイアについて語るプラントンの言葉に、ハイデガーは、アレーテイアの比較級（ἀληθέστερον）を発見した（vgl., GA34, S. 65）。ハイデガーは、これを忠実に、「一層非秘蔵的（unverborgener）」（GA 34, S. 65）と翻訳する。洞窟内での束縛から解放され、外部への道を登り、太陽のもとへと到る囚人には、それぞれの段階において、その都度の非秘蔵なものがあり、それは、前の段階よりも一層非秘蔵である（vgl., GA34, S. 65）。何らかの存在者が非秘蔵なものとして現れてくるには、その存在者との「対決」が必要であるが、この対決は、自制ある落ち着きとしての支えを現存在が自らに生起させることにおいて生じる。そうすると、アレーテイアの比較級に対応して、自制ある落ち着きや支えにも、一種の比較級を認めなくてはならなくなる。自制ある落ち着きや支えが無差別性において曖昧となっている状態から、一層自制ある落ち着きや一層支えがある状態への移行、あるいは、支えも支えのなさも忘れられていた曖昧性から、一層支えのない危険が生じること、これが、ハイデガーのパイデイア論から開かれる、私たちにとっての現実的なパイデイアの課題ではないだろうか。このように解釈することで、ハイデガーのパイデイア論は、私たちが慣れ親しんでいる教育活動を改めて捉え直すための、一つの「教育哲学」になりうるはずである。

引用文献

【ハイデガーの文献】

ハイデガーの文献からの引用は、以下の略符号を用い、その後に、原著の頁数を記した。

なお、邦訳に際しては、併記の邦訳書から多大な恩恵を受けたが、適宜、引用者なりの邦訳に改めた。

GA 1 = *Frühe Schriften*,Vittorio Klostermann,1978.『初期論文集』（岡村信孝他訳）創文社1996

GA 9 = *Wegmarken*,Vittorio Klostermann,1976.『道標』（辻村公一他訳）創文社1985

GA21 = *Logik*,Vittorio Klostermann,1995.『論理学』（佐々木亮他訳）創文社1989

GA 22 = *Die Grundbegriffe der antiken Philosophie*,Vittorio Klostermann,2004.『古代哲学の根本諸概念』（左近司祥子他訳）創文社1999

GA 27 = *Einleitung in die Philosophie*,Vittorio Klostermann, 2001.『哲学入門』（茅野良男他訳）創文社2002

GA 34 = *Vom Wesen der Wahrheit*,Vittorio Klostermann, 1988.『真理の本質について』（細川亮一他訳）創文社1995

GA36/37 = *Sein und Wahrheit*,Vittorio Klostermann,2001.

GA56/57 = *Zur Bestimmung der Philosophie*,1999.『哲学の使命について』（北川東子他訳）創文社1993

【ハイデガー以外の文献】

Ballauff,Th. *Die Idee der Paideia*,Westkulturverlag Anton Hain,Meisenheim/Glan,1952.

Bollnow,O.F. *Die pädagogische Athomosphäre ——Untersuchungen über die gefühlsmäβigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung*——, Quelle & Meyer,Heidelberg,1965

Fink,E. *Methaphysik der Erziehung* ——im Weltwerständnis von Plato und Aristoteles——, Vittorio Klostermann, 1970.

ガダマー ,H-G.『哲学修業時代』（中村志朗訳）未来社1982

今井康雄編『教育思想史』有斐閣アルマ2009

Kauder,P. *Der Gedanke der Bildung in Platons Höhlengleichnis ——Eine kommentie-rende Studie aus pädagogischer Sicht*——, Schneider Verlag Hohengehren,2001.

川村覚昭「ハイデッガーの教育哲学の地平」『京都産業大学論集 人文科学系列 21』1994

茅野良男『初期ハイデガーの哲学形成』東京大学出版会1972

是常正美「ヘルバルトの生涯と業績」ヘルバルト『一般教育学』（是常正美訳）玉川大学出版部1971

Mayer,A. “Martin Heideggers Beitrag zur Pädagogik”, *Zeitschrift für Pädagogik*,6, 1960.

中田基昭『教育の現象学——授業を育む子どもたち——』川島書店1996

Natorp,P. “Herbart,Pestalozzi und die heutigen Aufgaben der Erziehungslehre”, *Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik*,Fr.Frommanns Verlag, Stuttgart, 1907.

Natorp,P. *Sozialpädagogik ——Theorie der Willenserziehung auf der Grundlage der Gemeinschaft*——, 1921.『社会的教育学』（篠原陽二訳）玉川大学出版部1956

ナトルプ,P「哲学と教育学」『世界大思想全集』（田制佐重訳）1927

西山達也「アジールとしての翻訳——ヘルダーリン『ピンダロス断片』とハイデガー——」（第四回「ハイデガー・フォーラム」発表原稿2009／「ハイデガー・フォーラム」HP【http://www.shujitsu.ac.jp/shigaku/hf/index.htm】の電子ジャーナルにて閲覧可能）

小笠原道雄「教育学とディルタイ」西村晧他編『ディルタイと現代——歴史的理性批判の射程——』法政大学出版局2001

岡本英明『ボルノウの教育人間学——その哲学と方法論——』サイマル出版会1972

プラトン『国家（下）』（藤沢令夫訳）岩波文庫1995

Pöggeler,O. *Der Denkweg Martin Heideggers*,Verlag Günther Neske,1963(4.Aufl. 1994).『ハイデッガーの根本問題——ハイデッガーの思惟の道——』（大橋良介他訳）晃洋書房1985

相楽勉「ハイデッガーの『洞窟の比喩』解釈——見ることの自己忘却をめぐって——」ハイデッガー研究会編『＜対話＞に立つハイデッガー』理想社2000

高田珠樹「『ナトルプ報告』の成立とその位置」M.ハイデガー『アリストテレスの現象学的解釈——『存在と時間』への道——』（高田珠樹訳）平凡社2008

渡部明「ハイデガーとプラントン——二つの『洞窟の比喩』解釈から——」九州大学文学部『哲学年報 53』1994

渡辺二郎『ハイデッガーの存在思想』勁草書房1985

渡辺二郎「年譜」ハイデガー『存在と時間　Ⅲ』（原佑他訳）中公クラシックス2003

ヴォルツォーゲン ,C.v.「『それは与える』（Es gibt）——ハイデガー、そしてナトルプの『実践哲学』——」A.ゲートマン＝ジーフェルト他編『ハイデガーと実践哲学』（下村鉄二他監訳）法政大学出版会2001

（平成22年９月30日受理）